

4

中村聖司 さん

**中村聖司**（北海道立近代美術館 学芸副館長）

SIAF2014からSIAF2024に至るまで、北海道立近代美術館・三岸好太郎美術館の学芸員として札幌国際芸術祭に携わる。SIAF2024では北海道立近代美術館の展示「1924-2024 FRAGILE [こわれもの注意]」キュレーションを担当。

トーク内容

- 大きなインパクトがあった2014、大友良英と三岸好太郎が交わった2017
- 2020、吹き抜けの大きな空間に入るべき「キリンや象」は……むかわ竜！
- なにか新しいことができないか？「章立て」を崩すことに挑んだ2024
- 現代作家とコレクション、展示計画を何度も何度も書き直し、初めて30枚書いた
- 芸術祭のあり方の議論は市民から／コレクション＝地元の資産を活かす



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。

<https://youtu.be/ureqP6vQYV8>





2014から2024まで関わってきて感じる、 普段の美術館と芸術祭の共通点・違いについて教えてください。

私はいまの札幌国際芸術祭は、美術館とかなり近い取り組みを行っているのではないかなと思っています。美術館には大きく4つの機能があります。「調査研究をおこなう」、「展示をおこなう」、作品を「収集して保管する」、そして「教育普及をおこなう」というものです。

札幌国際芸術祭は、特に回を重ねるごとに「教育普及」的な視点をとても明確にして、内容に反映されているんじゃないかなと感じていますね。2014は、近代美術館や芸術の森、モエレ沼公園などが中心でしたが、教育普及的なイベントというよりは、まさに現代美術の展覧会という感じでした。それが2017、2020と重なっていくうちに、どのようにして芸術に対する理解、芸術祭への理解を深めてもらうか、そしてそれをどのように盛り上げていくか、という視点が明らかに打ち出されていくような印象を受けていました。

2020は近代美術館のコレクションを使いながら、ディレクターの天野太郎さんが考えていることにどう寄り添っていくかを考えていました。特に、会場の中に非常に大きな吹き抜けの部屋があり、そこに何を展示するのが大変気になっていました。いろいろ考えた結果、ギリギリのタイミングで、当時北海道内で発見されて話題になっていた恐竜「むかわ竜」の化石を出せないかと提案し、計画が進みました。残念ながら2020自体がコロナ禍で中止になってしまいましたが。

2024は、「むかわ竜」に代わる目玉のような展示物を見つけられるだろうか、というのが、実はコンセプト以前に大変悩んだところでした。全体の企画については、私はもう何十年も展覧会をやってきているのですが、大体の展覧会は「章立て」になるんですよ。第1章、第2章……となり、その章を説明する作品が並んでくる。なにかそれとは違う形でやれないかと思っていました。そこであまりがっちりとした枠組を構成せず、曖昧で違和感があるようなキーワードを出して行って、腑に落ちるというよりむしろ疑問を喚起する、という感じを目指して取り組みました。

そうした展覧会や展示は、芸術祭でも美術館でも一般のお客さんに一番期待されているところですし、ボランティアやコミュニケーションなども含めた、芸術祭が持つ「教育普及」の要素も、美術館の機能と方向性が重なっています。近代美術館がこれからも、地域の資産であるコレクションを積極的に生かして、芸術祭に関わってほしいと考えています。
